2023 年度　名古屋芸術大学　入学試験問題
特別選抜「社会人 / 海外帰国生徒 / 外国人留学生 入学試験 1 期」

入試問題

試験科目：「小論文」
日　　程：2022 年 11 月 19 日（土）
試験時間：５０分　／　解答字数： 800 字程度

芸術学部　芸術学科　芸術教養領域

対象コース：　リベラルアーツコース

[課題]
下に引用する児童書の一部を読み、問１と問２に答えなさい。

ミュージアムをたくさんつくろう

きみの歴史を安全に保管し、資料として残せる場所がある。

ミュージアム、つまり博物館や美術館だ。ミュージアムでは、保存のスペシャリストに財産の管理が任されている。目的は、その豊かな財産をなるべく多くの人に見てもらうこと。ミュージアムをつくれば、みんなの歴史を自分のものにできる。つまり、歴史を使って自由に思いを表現できるんだ。そんな場所って、なかなかないよね。

いまでは正統派のミュージアムばかりじゃなく、びっくりするようなものもある。たとえば、メキシコのカンクンには、海に沈めた彫刻を鑑賞できる「海底美術館（MUSA）」があるし、クロアチアのザグレブには、「失恋博物館」がある（恋の終わりに残ったものが集められている）。インドのニューデリーには「国際トイレ博物館」があるし、アイルランドには「妖精博物館」が、イタリアのボローニャには「ジェラート博物館」がある。どれも基本的なアイデアは同じで、ぼくらの過去と現在を残し、守ろうとしている。

いまはもうなくなってしまったけど、エジプトの王、プトレマイオス２世が紀元前３世紀に設立した「アレクサンドリア図書館」には、49 万巻の巻物が保管されていたという。天文台や、学者たちが議論するための建物が併設されていたらしい。

この図書館は３度も放火を受けた。最初は紀元前 48 年にユリウス・カエサルが、最後は紀元後 642 年にアラブ人が火を放った。なぜだと思う？　きっと、だれもが知識や情報を得られるようにしておくと、反抗的な考えが生まれるから。つまり、人びとが力をもつようになるからだ。権力者たちは、そう考えるとぞっとするんだろうね。

（小論文）

ピエルドメニコ・バッカラリオ、フェデリーコ・タッディア 著、
ミレッラ・マリアーニ 絵、ブルーノ・マイダ 監修
『だれが歴史を書いてるの？ 歴史をめぐる 15 の疑問』（森敦子 訳、浅野典夫 日本版監修）
太郎次郎社エディタス、2022 年、134-135 頁より引用

問 1
引用文中では、ミュージアム（博物館や美術館）とはどのようなところであると述べられているか。200 字程度で説明しなさい。

問 2
引用文中にはさまざまなミュージアムが紹介されている。あなた自身がミュージアムをつくるとしたらどのようなものをつくりたいと考えるか。展示物や場所などの具体的な特色とあわせて、つくる理由や動機などにも言及しながら、600 字程度で論じなさい。

[出題の意図等] ※問題用紙には記載されません。
高校三年生対象ではない、社会人、海外帰国生徒、外国人留学生、および 3 年次編入学の選抜試験という入試形態
をふまえ、下の項目の関心の度合いや力をみるため。
＜芸術・文化への関心と、歴史・教養を重視する姿勢＞
・ミュージアム（博物館や美術館）の意義や役割を理解できているか。
・知識や経験を活用し、課題に取り組むことができているか。
＜基本的な日本語運用力と思考の客観性＞
・問題文の意味を読み取れているか。
・引用文の内容を正確に把握し（問１）、自分の考えを明確に表現できるか（問２）。
・自分自身の思考を客観的かつ論理的に記述できているか。

2023 年度　名古屋芸術大学　入学試験問題
特別選抜「社会人、海外帰国生徒、外国人留学生入学試験　２期」

入試問題

試験科目：「小論文」
日　　程：2023 年 2 月 2 日（木）
試験時間：５０分　／　解答字数：800 字程度

芸術学部　芸術学科　芸術教養領域

対象コース：リベラルアーツコース

[課題]
別紙　（久野愛 『視覚化する味覚-食を彩る資本主義』抜粋）を読み、その内容を要約してください。また商品やサービスなどの中で、「食品サンプル」のように実物によく似たものを利用して効果を得ている事例をあげ、その事例に対する、あなたの意見や考えを書いてください。
なお、内容の要約の中には、以下の項目を入れてください。
・百貨店食堂において食品サンプルが導入されることにより生じた百貨店食堂側の利点と、客側の利点
・百貨店食堂が、お子様ランチを提供するようになった経緯

（合計で 800 文字程度）

[出題の意図等] ※問題用紙には記載されません。
社会人、海外帰国生徒、外国人留学生試験という性質をふまえ、文章の読解力、内容の理解力とその背景となる一般的な教養、論理的な思考、およびそれらを他者に伝えるための文章表現力を求める。また、当該領域の AP に合致し、CP に示した授業等で一定以上の能力を発揮し、将来 DP で示した人材となるべく努力できる人を求める。

今回の小論文試験においては以下の能力を求める。
・文章の内容の理解と、求められた問いに対しての的確な回答を、所定の字数の範囲で明快な文章で記述できるか。
・社会の中で、視覚的な知覚や、ミメーシス的な認知が、どのように利用され活用されているか具体的な例をあげることができるか。
・その事例の特徴や意味を、所定の字数の範囲で的確に解説でき、自らの経験や考えとともに記述できるか。

参考　芸術教養領域のアドミッションポリシー（AP)、カリキュラムポリシー（CP)、ディプロマポリシー（DP）

AP 芸術学部に設置する各領域各分野をはじめ、現代の多様な文化や社会に関心があり、自らの発想と知恵、感覚をいかしつつ、地域と社会がかかえる課題を協働して解決していく意欲があること。

CP 視聴覚メディアと言語、情報のリテラシーを習得し、少人数ゼミとプロジェクト授業を通して、世界と現代社会の問題を発見・設定して、その解決に取り組むスキルを修得できるカリキュラムを編成している。

DP 現代のリベラルアーツを習得し、芸術と文化を理解する教養あるジェネラリストとして、現代社会で広く活躍できる知見と技術、思考力を備え、卒業論文審査に合格した学生に対して卒業を認定する。

別紙

（芸術教養領域　３年次編入入学試験２期／社会人、海外帰国生徒、外国人留学生入学試験２期用）

「大衆食堂にはいられたのですね？」
「はい。デパートの裏でした」
（中略）
「それは、つばめ屋という店ですよ。看板を思いだしませんか？」
「気がつきません。陳列にならんでいる見本をみて、はいったものですから」
松本清張『紐』より

これは、松本清張の推理小説『紐』の中で、殺人事件の捜査をする刑事と被害者の妻との会話である。田舎から東京に出てきた妻が、新宿で昼食をとろうとした際に、店の看板には気づかず食品サンプル（食品見本ともいう）を見て入店したという一節で、店名よりも実際に提供されている料理に関する視覚情報を重視したことがうかがえる。

食品サンプルは、本物の食べ物の色や形・艶感を真似て、視覚的に味覚を表現した最たる例の一つであろう。最近では、海外でも知られるようになり、キーホルダーやマグネットなど様々な商品が販売されており、日本からのお土産としても人気がある。しかし、食品サンプルを置いているレストランは依然として圧倒的に日本が多く、サンプルを置いた陳列棚は日本的風景ともいえる。

そもそもどのようにして食品サンプルが生まれたのだろうか。食品サンプルに関する複数の著書がある野瀬泰申によると、その歴史は一九二〇年代初頭（大正時代）まで遡る。東京で人体模型製作の仕事に従事していた須藤勉が、日本で最初に現代のような商業用食品サンプルを作った人物だとされており、当時、日本橋にあった老舗百貨店「白木屋」が食堂に置くために食品サンプル作製を依頼したのが始まりだといわれている。〔中略〕

白木屋の食堂で食品サンプルを置くことになったきっかけは、一九二三年（大正一二年）の食券制度導入だと考えられている。客が店の入り口で食券を購入する制度で、席に着いてからメニューを見て注文を決めるよりも注文にかかる時間を短縮でき、客の回転率を高めることができた。つまり入り口で客が注文を決める際、一目でどんな料理があるのかを示す手段として食品サンプルが考案されたのである。

一九二〇年代は、百貨店の門戸が、それまで主な顧客対象としていた上流階級だけでなく、都市の大衆に向けて次第に開かれた時代である。特に関東大震災以降、複数の百貨店が生活必需品など実用品売り場を設けたり、バーゲンセールを始めるなど、より広い顧客層に向けた販売戦略に乗り出した。依然として多くの人々にとっては、普段の買い物をするには敷居が高かったものの、百貨店は特別な日に家族で訪れる行楽の場所となったのである。中でも百貨店の食堂で食事をすることは、買い物客の楽しみの一つであった。当時、外食は男性がするものだと考えられており、一般のレストランでは女性のみ、もしくは子供連れの客はほとんどいなかった。それに対し百貨店食堂は、買い物に来た女性

や子供連れの客にも開かれた外食空間となったのである。実際、子供連れの客は多く、昭和に入ると百貨店食堂は子供向けメニューの提供を開始した。一九三〇年、日本初のいわゆるお子様ランチ（当時は「御子様定食」や「御子様洋食」と呼ばれた）が日本橋三越で提供され、スパゲティやコロッケ、サンドイッチなどをのせたプレートが三〇銭で提供されていた。

折しも大正から昭和にかけては、洋食が東京など都市部を中心に広まり始めた頃である。明治時代までは西洋料理は富裕層のためのもので、一般の人々には手の届かない高価な料理だった。だが、白木屋をはじめ百貨店や街中の食堂が、オムレツやビーフステーキなどを比較的安く提供するようになったのである。料理本や雑誌などで次第にこうした洋食が紹介され始めてはいたものの、中には百貨店の食堂で初めて目にする料理もあったであろう。客が店先で注文を決めるにあたり、食品サンプルはどんな食べ物なのかを視覚的に伝えることができたのである。

こうしてみると食品サンプルは、洋食という日本人に馴染みのなかった料理が広まり始めた時期に必要となったとともに、百貨店の食堂のように、大衆向けレストランの誕生という新たな外食文化によって広まっていったといえる。サンプルをあらかじめ見ることで、これから食べる料理の見た目や味を想像できるとともに、必ずそれが提供されるという安心感さえも得ることができたのだ。

（久野愛 『視覚化する味覚 － 食を彩る資本主義』2021年 岩波新書 岩波書店刊 抜粋）

別紙２

（芸術教養領域　３年次編入入学試験２期／社会人、海外帰国生徒、外国人留学生入学試験２期用）

食品サンプルの例

食品サンプルによるキーホルダーの例